

## 和歌の絵画化とその実践報告

松原 一 義\*

### Report on Lectures on Tanka Poetry by Painting and Practice

Kazuyoshi MATSUBARA

#### 要 旨

和歌は、日本の古典文学であるが、その古典は、読書人口が減り続け、これまで研究者が培ってきた古典文学研究も、危機が懸念される状況が続いて久しい。そういう状況を受け、改訂された小・中学校の学習指導要領では、古典重視の方向が打ち出され、小学校教科書でも早くから古典を導入し、日本語の美しい響きに親しむことが求められている。

だが、そういう方向性が打ち出されても、現在の児童生徒が古典嫌いというのではお話にならない。私たち、国語教育に関わる者がそういう状況を見過ごしていいはずはない。そこで、私は、「古典を読むことが楽しくなる」という方法として、古典和歌を絵画化し、それを相互に見ることにより、和歌鑑賞を深めるという授業を提案してきた。

本稿は、教材としては『新後拾遺和歌集』を取り上げ、本学の学生を対象として、古典和歌の絵画化を取り入れた授業を実践してきた、その一報告である。

キーワード：新後拾遺和歌集、四季の和歌、絵画化、読解のプロセス、熟考・評価

#### はじめに

先に、第20番目の勅撰集『新後拾遺和歌集』を教材とし、主として四季部の和歌を取り上げ、「なぜ和歌を絵画化するのか——読む力がつく教え方・学び方——」というテーマなどで、本学の紀要に拙校を<sup>(1)</sup>発表したことがある。

吉田新一郎氏は、次のように言う。

---

\*特任教授 国語教育

日本の古典（古文）教育の主流は、訓詁注釈であり、ある権威者が考え出した解釈を生徒に教えるというのが授業であった。生徒は、その「権威ある解釈」には、たどり着けず、あるいはたどり着かずに終わるかもしれない。生徒が、何を考え、何を感じ、何を大切に思っており、何は拒否し、何がよく分からないのかといったことに関してはお構いなしで、そこに古典嫌いが生まれるのである。いわば、新批評論の立場に立つ教育と言えよう。<sup>(2)</sup>

さらに、吉田新一郎氏は、「ルイーズ・ローゼンブラットの提唱」<sup>(3)</sup>で、「reader response theory（読者反応論）」とか「transactional theory（交流理論）」とか呼ばれる学説を引いて、次のように言う。

ローゼンブラットの主張は、「作者が書いたテキストは、読者が読んで意味をつくり出すまでは紙に落ちているインクにすぎない」というものである。つまり、読者によって解釈され、意味がつくり出されて初めて作品になるというスタンスである。……中略……一人ひとりの解釈は違うわけですから、正解も存在しないことになります。<sup>(4)</sup>

もちろん、和歌に造詣深い学生もいるが、和歌は、古典嫌いの学生にとって、確かに「読んで意味をつくり出すまでは紙に落ちているインクにすぎない」ものと言えるかもしれない。古典文学を専攻した学生ならともかく、専門外の古典嫌いの学生は、どのような授業をすれば、古典和歌に興味と関心をもってくれるのであろうか。

そういう観点から提案したのが、和歌の絵画化の授業である。

本稿は、その絵画化を中心とした、本学における和歌の授業の一実践報告である。

## 一 PISA の 5 つの読解のプロセスと絵画化との関係

PISA の読解のプロセスは、『PISA 2003 年調査 評価の枠組み』<sup>(5)</sup>によれば、次のように指摘されている。

- 情報の取り出し（retrieving information）
- 幅広い一般的な理解の形成（forming a broad general understanding）
- 解釈の展開（developing an interpretation）
- テキストの文脈の熟考・評価（reflecting on and evaluating the content of a text）
- テキストの形式の熟考・評価（reflecting on and evaluating the form of a text）

その上で、「テキストを十分に理解するには、これらのプロセスのすべてを必要とする」というのである。

これを踏まえて、絵画化の授業の進め方との関連を簡単に見渡してみよう。

実施した科目名は、「日本語と表現」(1)で、前期の科目である。教材とした『新後拾遺和歌集』のきちんとした注釈書はまだ発行されていないので、まず、和歌のテキストを作成し、その語釈を古語辞典・歌枕辞典などで調べ、それを定型の枠をもつシートに記入し、学生に配布した。毎時、約10首程度の作品を「梅」「若菜」「桜」「ほととぎす」「月」などのテーマごとに選んでいる。ここまでは、「情報の取り出し」に相当しようか。ただ、語釈にどの項目を選び出すかの判断をするところは、すでに「理解・解釈」の段階に入っていよう。ここまでは、教員の準備段階である。

次に、実際の授業に入るわけだが、詞書、作者名は、教員が音読し、和歌そのものと語釈は学生が読むという形をとった。学生はあざやかに読む者、つまりながら読む者もいたが、その音読の間に次第に和歌の意味するものに近づいていったようである。その音読後に、教員がその和歌の通釈を試みた。通釈の先行研究がないために、難渋することもあったが、そういう過程を各和歌ごとに行った。ここまでは、「情報の取り出し」から「解釈」に至る過程であろう。

90分の授業の60分あまりが先の過程で費やされ、そこで、「これまでの和歌で、1首を選び、そのイメージを絵にしてみてください」と言って、以下、学生の作業に移る。学生にはあらかじめ和歌テキスト資料とともに、B5版の白紙と、疑問・感想を記すためのB6版の大学で印刷準備していただいている用紙とを配布している。ここで、教員が準備している36色のクレヨンも配布するが、数に限りがあるので、個人的に持ってきている者もある。B5版の白紙は、当初、A4版の用紙に、氏名及び絵を描くための枠を印刷したものを使用していたが、後で、スキャナーで取り込む時に、難しい問題が出たので、変更したものである。

さて、ここからが絵画化の作業であるが、和歌のイメージを完成するために通釈の行間を埋めるのは、学生の体験（間接体験をも含めて）である。その体験不足を補うために、教員側も写真資料などを提供することもある。読解の段階で言えば、和歌作品の外部の知識を引き出すことが必要である点、「熟考・評価」に属するだろう。

『PISA 2003年調査 評価の枠組み』によれば、その「熟考・評価」には、テキストの文脈・形式の2面があるが、和歌というジャンルにおける文脈を読みとるということであろうか。その文脈は、内容とも言い換えられており、「テキストの内容の熟考・評価」として、次のような記載がある。

読み手はテキストにおいて語られ、意図されていることについて、理解を深めることができなければならない。さらに、これまで持っている情報や他のテキストにあるような情報に基づき、自分の知識や信念に照らして、知的な表現をテストしなければならない<sup>(6)</sup>。

和歌鑑賞の問題に帰れば、読み手の学生は、和歌において語られ、意図されていることにつ

いて、理解・解釈を深め、さらに、配布資料や自己のもつ知識などを総動員して、和歌を読み取らねばならないということであろうか。「知的な表現のテスト」が絵画化に相当することになる。

なお、絵画化された作品及び、疑問・感想文については、それをスキャナーで取り込み、次回に受講生全員に回覧している。

## 二 和歌の絵画化の授業の是非についての感想（記述式）

平成 26 年度前期末に、和歌の絵画化の授業についての感想を記してもらった。本時の受講生は、40 名で、その感想は 39 名、1 名欠席であった。

例えば、次のような感想がある。

①授業を受ける前は、どうして和歌の絵を描かなければいけないのかよく分かりませんでした。②でも、実際に描いてみると、すごく想像力が豊かになると感じました。作者がどんな思いでこの和歌を読んだのか考えることで、作者の気持ちを理解することができました。③また、次の授業の時に、前回みんなが描いた絵を見ることができるのもいいなと思いました。(①・②・③……の番号は、私に付加した。以下、同様)

この感想は、授業の流れに沿ったものとなっており、絵画化の授業を肯定的に捉えている。そこで、次に、他の 38 名がこの授業をどのように捉えているかを、この①～③の観点を出発点としてながめてみたい。

まず、①については、次のようなものがある。

- 私は今まで授業で和歌を習ったことがあったけど、絵にするのは初めてでした。(2)
- 和歌を読み理解するという事は、高校の授業などで取り組んだことはあったが、絵画化したことはなかったので、初めてのことだった。和歌といえば、昔の言葉で、イメージ、自分の想像の世界をうまく広げることができるのか、とても不安だった。(2)
- 最初は、和歌を読んでそれを絵で表現することは想像もできず、絵をうまく描くのも苦手でした。(3)

これは、高校の授業などで、学生が絵画化の授業を経験したことがないという不安とささやかな期待とを語るものである。ローゼンブラットによれば、読むということは、「創造的なアドベンチャー」<sup>(7)</sup>だと捉えている。絵を描くのが苦手という技術的な不安もあろうが、絵画化の授業を受けるというのは、和歌という三十一文字の世界から出発して、三十一文字の字間（時

間でもある)を埋めてイメージの世界へたどり着くという冒険の旅をすることであり、先の感想には、その時空を越えた旅がもたらす不安と期待が込められているのであろう。学生はこれまでの自己の知識と経験によって、旅の困難を乗り越えなければならない。しかし、旅の目的地へたどり着いた時には、見晴らしのよい景色がまっている。だからこそ、学生は自分ももっとも好きな和歌を選択しなければならないのである。

(なお、末尾の( )内に記した数字は、類似感想の数である。厳密なものではないが、気づけば記したものである。以下、同様。)

②について。

- 訳から筆者の気持ちを考えて描くことによって、より深く和歌を読むことができたなあと感じました。(14)

「より深く」というところを「より鮮明に」という者もいるが、それは、具体的にどういうことなのか。他の感想を見ると、次のようなものがある。

- \*ただ読んだだけでは理解が足りないところでも、絵にしようと思うと、細かなところも理解しようと思い、理解が深まります。また絵にしていくうちに、今まで思っていたイメージから、あれ？実はこういうことなのでは？と新たな発見もできます。
- \*和歌を選び、その歌から感じ取ったイメージを絵画化することで、春・夏・秋・冬のそれぞれの季節の情趣をより一層感じることができた。その中でも、大切な人を思って書いた歌が季節折々の言葉で表現されていて、それぞれの季節の良さを知ることができた。
- \*和歌を絵に表すことで、その和歌を書いた人の気持ちや顔の表情が文で表してあるのより、より分かることができました。また、どのような場所で何が起きているのかが絵だと良く分かり、後から見ても文では分からない所が絵を見ると、こういう感じになっていたんだ、となっとくができるものでした。
- \*昔の日本人が感じたことや思ったことが表されている和歌を勉強できるので、楽しかったです。(3)
- \*昔の人はどういう服装や髪型をしていたのかが分からなかったのですが、想像しながら描き、少し今風の感じになりましたが、良い感じに描けたと思いました。
- \*和歌を実際に絵に表現してみることによって、その和歌の背景を頭に浮かべることができました。また、桜等の花も今まで何度も見てきたけど、絵にするときに、じっくり花びらなどを見ることができました。

\*通釈では分かりづらい文なども、想像しながら絵に描きあらわすことにより、和歌の世界に入り込むことが出来ると思うし、想像も働くので、自分にとってよいものとなりました。(2)

\*和歌を読むだけでなく絵に描くことによって、頭の中に和歌の内容が入りました。思いえがいた和歌の世界を絵で表現できました。言葉で感想を書いたときにうまく伝わらない部分をかくことができました。(3)

\*絵にすることで、自分なりに表現でき、より想像が広がるなと感じました。(8)

- 和歌の通釈を見て、和歌の意味を考えながら、その情景を思い浮かべ、自分なりに絵画にして表現すると、その和歌に対して関心などがうまれ、親しみやすくなった。(2)

この「親しみやすくなった」は、「身近に感じるができる」とも表現されている。和歌の意義的な理解が、自己の体験を踏まえて絵画化することにより、自分の認識した世界のものに転じたからであろう。その点、この絵画化は、学生の外部世界にあった和歌表現が、内部のものとして把握されなおされる作業だったわけである。

③について。

- クラス内（受講者間のことであろう）で、他の人の絵を回して、それを見ることにより、そういう表現の仕方もあるんだと学べて良かった。(2)
- 他の人の絵を見てみると、同じ和歌の絵を描いていても、まったく違うとらえ方をしていることに気がつくことができました。(5)

この感想と似ているものに、「同じ歌をもとにしていてもその人が見ている光景が違うので、それぞれの人の絵を見るのはとても新鮮で視野が広がったように感じた」とするものもある。同じコースで同じ道案内を見ても、旅での経験は人ごとであり、見える光景も違うということであろうか。そういう他者の経験を間接経験することについて、「おもしろいな」という感想もある。

- 同じ和歌を絵にしているのに、その背景やイメージの多様性に驚かされました。

この感想は、先のとらえ方、表現の仕方を総括したものとなっている。

そもそも学生は、教員の授業形式を、「和歌に出てくる語句の意味を理解して、通釈をし、先生が用意して下さった写真などを参考にしながら、それを絵にあらわすといった授業形式」と捉えている。そう捉えた学生は、さらに、「通釈では分かりづらい文なども、想像しながら

絵に描きあらわすといったことにより、和歌の世界に入り込むことが出来ると思うし、想像力も働く」と述べる。こういう捉え方ができると、自ずから良い結果に結びつく。例えば、次のようなものである。

- 今まででも高校や中学で和歌の勉強をしてきたけれど、絵画化することでもっと理解を深めることができたと思います。また、絵を描くことや言葉で表現することが、すごく苦手でした。その両方をしたことで、自分の中で絵を描くこと表現することが少し得意になれたような気がしました。
- 和歌の勉強は、高校中学でもやったけど、大学でこの授業を受けたことが、一番理解を深めることができたと思います。描いた絵や感想をまとめてもらったのを見て、他の人の意見や考えを見れたのも、いい刺激になりました。(2)
- イメージが難しいものもあったけれども、自分の中で想像して表すことで、理解につながると感じました。
- 和歌を絵画化して表現することで、想像力と文を読み取る力がつくと感じました。そして、一枚の絵で物語を伝えるために、その和歌の特徴を描こうとする力がとても成長するなと感じることができました。
- 自分は絵がとても下手で、絵を描くことが苦手でしたが、この授業で毎回絵を描くことによりだんだんと想像力がついてきて、絵を描くことが楽しく感じられるようになりました。「この和歌はこういう風景なんだろうな」とパッと思いつけるようになり、この授業の楽しさを感じることができました。
- 自然や生き物などたくさんの和歌をやって、それを絵で表現することは、表現力や想像力が鍛えられて良いと思った。
- この授業で想像力が少し広まったと思いました。
- イメージを絵にして描くことで、言葉だけでは伝わらない自分のイメージが他者に伝えることができるので、いいなと思います。また、多くの人と共感できるところがとても良いと思います。

あまり古典学習に慣れていない学生の意見であろうが、次のようなものもある。

- 絵を描くということは、その和歌を読みとらなければいけないので、普段聞きなれない言葉の意味や読み方などを知るきっかけにもなりました。また、和歌の中では、今の私たちが行っていない、行っても一般的ではない行事についてうたっているものもあり、昔の人の暮らしぶりについても知ることができました。

時空を隔てた和歌世界に近づきやすくするために、地名や花の名・虫・鳥などが出てくると、写真資料・音声資料を提供することもあった。

- 言葉だけの和歌だと全然イメージが出てこなかったけど、先生が色々な写真や音声での鳴き声があったから、絵が描きやすくて、イメージしやすかった。その人がどんな気持ちだったのか想像しやすかった。(2)

絵画化に**批判的な意見**・感想も、わずかながらある。

- 和歌を通釈して頭の中でこんな感じなのかと想像し、絵に書くと意外と面白くてでき上がり楽しかったです。ただ、自分のイメージとにつかない場合があるときは、厭な気持ちが残りました。
- 和歌を見てそれを絵にかくのが少し難しい時もありました。例えば、言葉が難しい時は、どういう絵をかくのか、なかなかすぐに思いつきません。

これは、努力をしているが、言葉に対する困難さを述べるものである。さらに補助的な情報が必要であろう。

- 絵画化するのとはとても難しかったです。想像してかくのはとくに大変でした。
- 毎時間だと大変なので、二回の講義で一つの和歌の絵をかくほうが良いと思った。

しかし、多くの者は、その困難を乗り越えているようである。

- 和歌やその通釈を読み、自分でその時の情景や作者の気持ちを考え、絵にするのとはとても難しかったけれど、想像力がふくらんで楽しかったです。

さて、絵画化の授業を実際の小学校の授業に結び付けて述べるものもある。

- 和歌一つひとつの言葉の意味や独特の表現から、作者が見ていたであろう風景・景色を自分なりに絵画化することで、和歌に広がりをもつことができる。また、このような授業を小学校で展開することができたならば、国語科を通じて**図画工作科との繋がりが**もて、想像力を広げることができる。一つの和歌でも、捉え方や感受性は人それぞれ異なり、あらゆる絵を見て楽しむことができる。

これは、図画工作科との連携を模索する意見。

- 絵を書くことは苦手ですが、自分の頭の中に広がった風景を描き表すことができたと思います。たまプロ（卵プロジェクトか）の小学校で、俳句を学習していたときに、子どもたちが絵をノートに描いていました。自分の想像を言葉に表すのは少し難しいですが、絵画化することで、相手に伝わりやすくなると思います。



和歌の絵画化の方法は、**俳句にも**転用できるものと思われる。

最後に、次の感想を示しておく。

- 和歌の文字そのものだけだと、読んでもなかなかイメージがわきにくいです。考えれば考える程深みが出るのが、和歌の特徴だと思います。そのイメージを絵画化すると、自分の頭の中で考えているその和歌の自分なりのとらえ方を表現できるので、良い表現方法の一つであると私は思います。
- 和歌を絵画化する授業は、とてもためになる授業だと思う。

以上、39名の感想のすべてを取り上げて、順次述べてみた。各意見の正確な人数を統計的に表示することはしなかったが、これが、和歌の絵画化の授業の是非についての、学生の反応である。

### 三 日本語の表現の豊かな広がりについて

絵画化の授業を通しての日本語の表現についての気づきを、学生たちに書いてもらおうと、次のようなものが出てきた。

- この授業で、私は日本の言葉の豊かな広がりを感じることができました。①その一つとして、五・七・五・七・七という短い歌の中で、心情や情景を深く表現していることが挙げられます。私は83の「小初瀬の花のさかりやみな河 峰よりおつる水の白波」という歌が好きなのですが、この歌に出てくる満開の桜は、滝に例えられていて、美しさと共に迫力があります。
- ②また、712の「一葉こそおつともおちめ涙さへ さそひなそへそ秋の初かぜ」という歌には、秋の初風に心細さを感じる心情が伝わってきて、一方では涼しくさわやかな秋風が、一方ではとても切ない感じをさせることが表現されています。
- ③もう一つの理由として、人にだけでなく、植物や季節や動物への愛しさを表現していることが挙げられます。春を待ちわびる人、ほととぎすの鳴き声を愛しく思う人、桜を少しでも長く楽しみたい人などの思いが、非常に伝わってきて、日本の言葉の広がりを感じました。

この感想では、①83番歌と②712番歌の表現に惹かれたことを述べ、さらに③人にだけでなく、植物や季節や動物への愛しさの表現に着目している。そして、確かに、そこに日本語の言葉の豊かさを感じているのである。

①についていえば、授業で配布した資料は、次のようなものである。

(本文) 83 小初瀬 <small>(せはつせ)</small> の花のさかりやみなの河 峰よりおつる水の白波	藤原清輔朝臣
(通釈) 83	藤原清輔朝臣
(語釈) 清輔 34, 歌枕名 5641。 ○小初瀬 <small>(せはつせ)</small> = 大和国の歌枕。「初瀬」に美称の接頭語「を」をつけたもの。 ○花のさかりや = 花の盛りなのだなあ。「や」は詠嘆の終助詞。 ○みなの河 = 「水無の河」で、水が無い河のことか。 ○峰よりおつる水の白波 = 桜が満開で、峰から落ちる滝の水が白波を立てるように見えるというのであろう。	

この歌の本文と語釈（○部分）を受講生が音読し、その後に、教員が、次の注釈を提示する。

(ただし、詞書と作者名は教員が音読)

大和国の小初瀬の桜の花は満開なのだなあ。水も無い河なのに、峰から落ちる滝の水が白波を立てるように見えることよ。(いや、目をこらして見ると、河の滝と見たのは、満開の桜だったよ)

②の歌の配布資料は、次のようなもの。

(本文) 712 一葉こそおつともおちめ涙さへ さそひなそへそ秋の初かぜ	僧正杲守 <small>かう</small>
(通釈) 712	僧正杲守 <small>かう</small>
(語釈) ○一葉 = 285 の語釈参照。 ○おつともおちめ = 落ちるとしても落ちるだろうが、しかし。 ○涙さへさそひなそへそ = 涙まで誘って落とし添えないでください。「さへ」は、添加の意の副助詞。「な……そ」は、懇願的な気持ちを含む制止の意をあらわす。 ○秋の初かぜ = 秋になって初めて吹く風。秋風は涼しく、さわやかであるが、心細さを感じさせるとされる。	

この後、教員が提示する通釈は、つぎのようなもの。

秋の訪れを知るといって一枚の落葉は、落ちるとしても仕方がないが、涙まで誘って落とし添えないでください。心細さを感じさせる秋の初風よ。

この後、学生は好きな1首を選び、その歌を絵画化するのである。

③の感想は、これまで受講した和歌全体についてのものとなっている。

## 1 短詩型三十一文字の表現法について

では、他の感想はどうなっているのだろうか。

- 旅人やほととぎす、ほたる、七夕の織姫と彦星など、生き物や季節のものに対して、色々な気持ちを短い「和歌」の中で表現していて、すごいなと思った。

短い「和歌」について、次の感想もある。

- 和歌には文字数が限られているので、全てのことを細かく説明できません。それに、読んだ時に、すんなりきれいに読むことも大切なのではないかと思います。そういった限られた文字数で、言葉に深みを持たせたり、言葉をかけていて二通りの意味が読みとれたり(284番の歌など)するところがおもしろいなと感じました。

④和歌を読んだだけだと、自分の中であまり理解できていなかったけれど、語釈を通して和歌のイメージを広げることができました。そして、先生の通釈を聞き取ることで、より和歌のイメージをはっきりさせることができました。そうすることで、今の私たちと昔の人が詠んだ和歌が繋がったように感じる事ができた時はおもしろいなと思いました。

⑤絵に表したイメージを他の人の分も見ることができたので、同じ和歌でも、同じ季節・花・行事のことをうたった歌でも、読み取る人が違うと、違った絵、イメージになるところもおもしろいなと感じました。

まず短詩型の面白さに触れるのだが、ここでは、その音読の大切さにも言及する。ちなみに、284番の歌は、「河の瀬におふる玉もの行く水に なびきてもする夏ばらへかな」。この歌の「なびき」が、「玉藻」の縁語で、「水に靡く」と「恋人に靡く」との掛詞になっているのである。

次いで、④⑤は授業の流れを解説したもので、それぞれに「おもしろいな」という点を見出している。

掛詞を用いた歌については、次のような感想もある。

- 一つの言葉に二重の意味を込めることで、短い和歌の中で、深い感情を表現していることに感動しました。

125 桜色もわがそめうつすから衣 花はとめけるかたみだになし

「かたみ」が、「形見」と「片身」の掛詞になっていて、衣の片身だけでなく、桜の花の形見にもかかかっていてとても深いなと思いました。

142 岩つつじいはでやそむる忍ぶ山 心のおくの色をたづねて

忍ぶ山に、「情熱をわが心の下に隠すこと」という意味があることに驚きました。想い人に気持ちが伝わらないモヤモヤが、こんなキレイな和歌に込められていることに感動です。

もう一つあげておこう。

- 同じ言葉なのに、歌によっては姿が変わることです。

例えば桜花ですが、そのまま花の姿だったり、人に例える擬人法を使ったりして、人それぞれの様々な考え方が出ていると思いました。

また、同じ意味を持っている言葉でも季節によって変えているところがあります。例えば、夏の雨だったら五月雨など、とても季節がわかりやすくなると思いました。

他には、一つのものをほかのものに見立てているところがあります。例えば、白梅は雪に見立てたりしています。景色を想像したとき、さらに景色などがきれいになると思いました。

和歌の表現法に触れた感想になっている。同じ見立てについてのコメントに、次の感想がある。

- 和歌の中で季節は「春」、そして、「桜」が降っている内容の和歌で、「雪」に対する表現がとても広いと感じました。「桜」を白い雪に見立てていたり、桜が散り積もったのを雪が積もったりと表現していて、ああ、このような表現の仕方があって、今の時代の人では表現しない言葉をつかっていて、言葉は広いな、と感じました。

これは、125番の歌、「風かよふ尾上の桜ちりまがひ つもらぬほども雪とみえつつ」についての感想であろうが、短詩型としての和歌の豊かな表現が生み出される一つの秘密に気づいたということであろう。

## 2 花の歌について

先の②で、「秋の初かぜ」について触れたが、**花と月**の歌に共感した感想もある。

- 私は桜の花びらが散って、その花びらが風に吹かれて雲や雪のように見えると表現している和歌が多くあって、とても美しいと感じました。その光景は美しいけれど、切ない感じがするというところに共感できました。また、和歌は切ない気持ちを表現していることが多いと感じました。「待ち出づる山のはながらあけにけり 月にみじかき夏のよの空」(245番)の和歌の通釈で、「月が出てくるのを待っていたが……」とあるが、月が出てくるのを待っていたというのが、とてもおもしろくて、その光景を想像すると、とてもきれいな光景が思い浮かびました。その後に「……月の出をまつのは秋の夜とちがって夏の夜は短すぎることよ」と通釈があるが、月を待っている姿は季節によっても、イメージが違

うように頭に浮かんできました。私も、今度同じように月が出てくるのを待ってみたいと思いました。

桜花の美しさや山の端の月の光景に心惹かれた感想である。

月と桜花とを組み合わせた光景を描いた歌に注目する感想もある。

108 暮れはてて色もわかれぬ梢より うつろふ月ぞ花になり行く

これは私が一番気に入っている短歌です。この短歌を聞くと夜桜の思い出がよみがえるからです。真っ暗な中、桜がピンクかもよくわからない中、こずえからの月光により、桜のかげがわかる感じがとても美しいなと思い、イメージがとても広がるなと思いました。

自分なりのイメージがもてる歌だというのである。この月は、「望月」を過ぎて、「十六夜の月」か「立待ちの月」であろうか。

まず、「日本語の四季を表わす言葉に広がりを感じました」として述べる、次のようなものもある。

- 春の季語はうぐいす、梅、桜などで、温かそうな、はなやかな雰囲気伝わります。

たとえば、桜は、満開の桜や散っている桜、空に舞う桜など、様子が違くと、まったく感じる印象が変わります。ほかには、遠くに見える桜を白雲に見立てたり、落ちた桜を雪に見立てたりしています。……（中略）……

昔の人があたりまえだと思って詠んだ歌を現代人が読むとその時代の文化が読みとれます。

桜の美しい表現についての表現が共感をよぶのであろうか。桜については、次のようなものもある。

- 「桜」を表現する言葉は、「桜花」「花のかげ」「残りの花」「花さそふ」「桜色」など、この短い単語の中に、桜が咲き、それを見て感動する日本人の心や、月の光に照らされた夜しか見られない桜の一面、散り際に残された桜の花のさみしさを私たちに想像させてくれます。

「のこりの花」は、実は、『古今和歌集』の紀貫之の歌を授業に取り入れたものであるが、さすが貫之の歌というべきであらう。読んだ者に強い感銘を与えている。

- ……（前略）……季節を表す言葉でも、様々な表現の仕方があって、「あ、桜でもこんな表現の仕方があるんだ」と感じました。115の桜を散らすというのでも、114や116など、散るといっただけでも、誰かが、散らないで欲しいという悲しい気持ち、散ってしまうのか……という悲しい気持ちの二つがあって、色々な見方があるんだなと感じた。

ここでいう和歌は、次のものである。

- 115 桜花にほふにつけて物ぞ思ふ 風の心のうしろめたさに  
114 花さそふ風は吹くとも九重の 外にはしばしちらさずもがな  
116 待ちしよりかねて思ひしちることの けふにも花の成りにけるかな  
桜花に対する繊細な心の動きに注目した感想になっている。

### 3 夏・秋の歌などについて

四季の言葉について、さらに次のようなものもある。

- 日本の言葉は四季ごとにさまざまな言葉があり、例えば、春だったら「桜花」や「今さきぬらし」、「花のさかり」など、春に咲くもの、その桜が咲いたこと、桜が満開になったことなど、春の訪れをかんじさせるような言葉がありました。

また、夏では、「鳴く蟬」、「蟬の羽の衣」など、夏の虫が鳴き出す、人々の服装が薄くなるなど、夏をしらせるものがありました。

秋では、「ふくるも秋と」や「袖におく秋のしら露」など、秋の訪れを知らせるものや、出来事などがありました。

言葉は他に人の気持ちや感情、動物の行動、植物の動きなど、……（中略）……いろいろな場面で使われているので、言葉は大切な、かけがえのないものだと思います。

ここには、夏秋の歌群についての言及もある。

ほととぎすの和歌について述べるものもある。

- ホトトギスの和歌で、「他に行くところがあってもまだ私の所で親しく鳴いておくれ」と鳥が去っていく悲しさを物がたる和歌で、昔の人って意外とロマンチックな人が多かったんだなと感じました。昔の人の和歌を見ると、とても純粋な心の表し方だなと思い、言葉と言葉を結びつけてイメージすることが楽しかったです。

これは、和歌が、古人と心を通わせる通路となったというものであろう。

また、花と月、花を雪に見立てる表現に触れた後で、次のように述べる感想もある。

- ほととぎすという鳥も、いくつもその鳥を表現する漢字があり、その歌の読まれた時代によってあてられた漢字が違うのかもしれないと感じることがありました。

ただひとつの言葉や表現にとらわれず、別の表現でそれを想像させたり、その歌に合うような漢字をあてはめたりと、類似するような歌はあっても、同じ歌は二つとないことが日本の和歌の面白さです。

和語と漢字との関係に注目したコメントとなっている。

桜・梅雨・螢・七夕・ほととぎすなど、言葉の表し方への関心を述べた後で、次のように述べる感想も注目される。

- 一番広がりを感じたのは、愛する人との別れや旅に行く人の心境をよんでいた所だと思いました。

847 行人の思ひやすつるとまる身は それぞわかれのしづ心なき  
旅に行ってしまう人は、他のものを見捨てるのか。そして、後に残った身には別れが  
つらくおだやかでない、ということをやんでいて、残っている人目線でもまれてい  
る感じました。別れはとでもつらいことで、心ははりさけそうなほどおだやかでない  
という気持ちが、ストレートに伝わってくるものだと思います。

この歌は、離別の部の歌であるが、離別の心情は受講者に素直に響いてきたようである。

#### 4 和歌の授業について

先に、和歌の授業を受ける不安を述べる学習者の存在を指摘したが、その授業を積極的に受けた感想にも触れておきたい。

- 元々、高校の古典の授業が好きだったためにこの講義を受講しました。この授業を通して初めて和歌というものに深く関わった気がします。和歌をよんでみて、すごくイメージの湧く和歌が多かったです。例として桜をとってみると、桜の色、香り、場面、天気、朝なのか夜なのか、“桜”についての和歌であっても同じものはなく、一人一人の感じ方であったり、場面が全く異なっていたり、とても感慨深かったです。それから、和歌を通して今と昔で変わっていないことも多かったことに驚きました。桜や梅は昔から存在しており、人々の心をなぐさめる存在であったことは今も昔も変わっていません。それから、“七夕”も語りつがれ、今も昔も内容が変わっていないことは素晴らしいことだと思います。和歌を通し、日本の歴史の長さを感じました。歴史は長いけれど、変わらずあることもあるのを知り、温かい気持ちになりました。

これは、和歌を自分のものとして受けとめたことを示すコメントであろう。和歌を訓詁注釈という段階にとどめず、自らの生活体験を踏まえて、読みとめた成果と考えてよからうか。

古人とのつながりを感じたとするものを、もう一つあげておこう。

- 昔の人がどうしているかを考えて和歌を読んだのか、通釈などから想像することで、心が豊かになり、日本語の表現の広がりにつながったと思います。最初は難しくてなかなか読めなかった和歌も、回数を重ねるごとにスラスラ詠めるようになっていきました。それは和歌を読むのが楽しいと感じていたからだだと思います。読んでいるうちに昔の言葉にも慣れ

ていき、自分の中で日本語の広がりを感じました。今まで学んだ和歌の中に、「春風も心してふけ我がやどは 花より外のなぐさめもなし」(107番)という歌があって、最初に思ったのは、春風に対して、「心してふけ」という言葉は、とてもインパクトがあるなどということです。表現の仕方がすごくおもしろいと感じました。しかし、通釈を見てみると、自分が住んでいる所には、なぐさめるものが花しかないのだから、散らさないでくれ、という作者の切実な思いが込められていて、心動かされました。

この歌は擬人法を用いたものであるが、人と自然とがやさしく溶け合った歌となっている。こういう歌に心動かされる読者には、そういう感受性が豊かに残っていることも指摘しておくべきであろう。

#### 四 問題点とその解決策について

以上のようにながめてくると、絵画化の授業は良いことづくめだが、問題点もある。「疑問と感想」を書いてもらっていたので、それをあげておこう。

- 昔の人の名前は読むのが難しかったです。
- 個人的には、絵が好きでもう少し丁寧に絵を描きたいので、時間的余裕が欲しいという気持ちでした。
- 私は個人的に絵が下手なので、うまくかけなかったです。
- 和歌が多く、通釈を書きとるのが大変でしたが…… (4)
- 色鉛筆をもっと増やして欲しい。(2)
- 一つ一つの和歌についてくわしく説明を聞きたいと思いました。(3)

作者名は、確かに読むのが難しい。そこで、詞書と作者名は、授業者が読み、和歌本文と語釈部分を受講者が読む形式にしていた。が、私自身も読めない作者名があり、音読をして済ませるケースもあった。絵を描くのが上手、下手の別はあるが、必ずしもそれにこだわることはなく、むしろ、歌の世界をいかにイメージ化できるかを要求していた。和歌を多くとりあげるか、精選してとりあげるかにより、解説を詳しくするかどうかも決められるところである。また、色鉛筆を増やすことについては、持ち運びの問題、予算の問題があり、無理な要求であるが、そういう意見を述べた受講者自身が、「色鉛筆を持参という形にすればよい」と救済策をも述べていた。

これらの感想に対して、授業者にとって有り難いと思ったのは、次の感想である。

- この授業は先生が分かりやすく和歌を通釈してくれたり、絵が下手な子や、苦手な子



でもやってよかったと思える授業だと思います。通釈はたまに聞きのがしてしまうところもあるが、文章力をつくし、この授業は色々な力がつき、更に日本の昔の風景を想像することができ、昔の話も聞けるのでやって良かったです。あと、先生が山形の人は花を食べると聞いたとき、私は山形から来ているので、みんなに山形の文化を教えていたときは嬉しかったです。

また、次の感想も有り難いものであった。

- 私はこの授業を受ける前までは、和歌などに興味を持ったことはありませんでした。この授業を受けたことによって、言葉の感じ方は人それぞれ違う発想をもつものだと思います。花びらが落ちる時に、「山の峰の白雲」という表し方に共感しました。

これは、124番の歌「ちりまがふ花の跡ふく山風に かたみあだなる峰の白雲」という歌を見ての感想である。

最後に、「一つ一つの和歌についてくわしく説明を聞きたい」という意見についてだが、この意見は、かなり和歌鑑賞能力がある者が出したものであろう。『新後拾遺和歌集』は注釈書もなく、私が提示した通釈も、時としておぼつかないものがあった。しかし、『古今和歌集』や『新古今和歌集』、『百人一首』などには、歴大な注釈の歴史があり、望まなくても詳しい説明が必要になることもある。にもかかわらず、この意見を述べた者にとって、私が提示した語釈・通釈が物足りなかったというのも事実である。

私が授業に追加補入した紀貫之の「なごりの花」の歌が、<sup>(8)</sup>受講生に印象深く受けとめられていることから、『新後拾遺和歌集』中心の授業にするにしても、教材を『新後拾遺和歌集』に限定せずに、時々挿入すべきかと考える。そうすれば、特定の歌を深く鑑賞したいという受講者の要望にも応えられるであろう。

## おわりに

以上、平成26年度前期の「日本語と表現(1)」の授業について、その実状と反省点について報告してみた。最後に、もう一度、ローゼンブラットの読書態度に触れた記事を引いておこう。

読むことは、自分の考えを変えたり、感想が変わったり、それまで知らなかった新しい事実や視点に気付いたり、多様な感情や気分を味わうなど、変化に富んでワクワクするものだと言うのです。<sup>(9)</sup>

学生たちが、これからも和歌をワクワクしながら読むことを願っている。

注

- (1) 拙稿「なぜ和歌を絵画化するのか——読む力がつく教え方・学び方——」川村学園女子大学研究紀要, 第24巻第2号, 2013年3月。
- (2) 吉田新一郎『「読む力」はこうしてつける』2010年11月30日, 新評論。「新批評論」については, 40p.6-13参照。new criticismのこと。意味はすでにテキストの中にあり, それを引き出すのが読者の役割だとする考え方。
- (3) 同(2) 39p. 脚注。Louise M. Rosenblattのこと。2005年に100歳で亡くなった。長年ニューヨーク大学で教授を務め, 「読み」の分野で大きな貢献をした。
- (4) 同(2) 39p. の①による。
- (5) 国立教育政策研究所・監訳, ぎょうせい, 2004年, p.096
- (6) 同(5) p.099
- (7) 同(2) p.43
- (8) 「桜花散りぬる風のなごりには 水なき空に波ぞ立ちける」(古今集・春歌・89番)(小沢正夫・松田成穂校注・訳, 『古今和歌集』1994年, 小学館)
- (9) 同(2) p.43

後 記

本稿に引用した感想は, 平成26年度「日本語と表現(1)」の受講者のものです。本稿をまとめるに際し, 引用掲載をご許可いただいた受講者の方々に, 全員の名をあげさせていただき, 深甚の謝意を表します。なお, 敬称を省略することをお許しください。

受講者名:

早川貴子・細谷葉月・椎名直美・古田有沙・米島知里・潮麻美・小林理紗・横須賀史織・小泉結有・青柳彩・格和里奈・尾形百合香・高津春奈・宮村佳奈・鈴木敦子・戸塚亜緒衣・赤沼亜美・山下留身・鈴木奈菜・大島美紀・磯明梨・新村綾乃・平柳明穂・藤代優・北岡美里・石井悠・レンジ・ジーン・ケネス・原田千晶・古庄田萌・小田綾乃・北島奈々・横地彩香・古谷美帆・吉村優・日高里砂・山田ひかり・林美沙・池田和香那・藤田有暉